

山に親しみ山に想う (8)

— 山里の人の言葉 —

<文・写真> =岡本=

「長い人生の中で心に残る一言、忘れ得ない一言は？」という問いかけをしばしば耳にするのは、誰しもそんな一言を必ず持っているからだだろう。読んだ書籍の中で、高名な人物の講話の中で見つけた「立派な言葉」ではなく、市井の人が何気なく語った言葉がいつまでも胸に残っていることがある。

自分の山歩きの場合に限ってはといえばどうだろうかと思ひ巡らしてみると、心に残る言葉が幾つか浮かんでくる。それは市井の人の日常の言葉である。

そんな言葉が忘れられないのは、山行という非日常の時に聞いたからであるということもあるが、音声としての言葉の含意だけでなく、何と言ったらいいか適切な表現が見付からないのだが、語った人の人となりや人生観が濃厚に裏打ちしたものだからだろうか、また、その人の表情と声色に言葉以上に訴えるものがあつたからだろうか。だから文字に書くと、何の変わり映えもしないものなのに、何でそんな言葉に気を留めるのかと言われるかも知れないが、その言葉は深く宏大だし、優しく胸に迫るものである。次のような幾つかの言葉が思い出される。

・山頂から降りてきて、バス停までの道を通りすがりの犬を連れた年配婦人に尋ねると、丁寧に言葉を尽くして、教える風な口調でなく優しく語ってくれる。そして最後に「御苦労さまでした。」という丁寧な一言が静かに付け加えられた。山歩きは、疲れるという意味で下山者は苦労してきたわけであるが、年配の婦人の「御苦労さまでした。」には、それ以上の「広く深いもの」があるように感じられた。「山に入ってください、山を慈しんでくださってありがとうございます。」と。山里の人が山に入ることの少なくなったことへの後悔と後ろめたさに対する贖罪のことばのように思われる、そう感じられる声色であつた。

・山里から登山道に入る際に、農家の庭先の道を通る場合がある。そんな庭先を通りかかった際、朝の洗濯物を乾かしているその家の婦人から「…に登るのですか。気をつけて行ってください。」と声を掛けられたことがあつた。「はい。ありがとうございます。行ってきます。」とハツとして思わず応じる。こんな心のこもった「行ってらっしゃい。」は、久しく聞いたことがない。山行の出だしに、こんなことがあると、清々しい気持ちで登ることができる。この挨拶だけで、今日一日の山行の半ば以上の目的を達したような至福に浸り得る。

・登山道への取付きはどこかと思案してる際に、庭で話し込んでいる老夫婦がいるのに気づき、道を尋ねた。老婦人は丁寧に道順を話した最後に、下山して戻ってきたら「寄ってくださいね。」と言われた。下山時刻も不明なので曖昧な気分で「はい」と逃げを打つような返事をしてしまった。都会人の性(さが)なのか、ただ教えてもらっただけの間柄なのに、「お茶」に誘われ応じるのはどんなものだろうか。京都人の「おぶづけでもどうぞ(本音は、そろそろ帰って下さいの意)」が頭をよぎった。結果的に下山の際、ご夫婦の家を素通りしてしまった。山里の人の自然な「おもてなし」の厚意を足蹴にしてしまったのではないかという慚愧の念を未だに引きずっている。

・山里の外れの登山道入口で、いざ入山と身支度を整えていると、散歩がてらの老婦人が来られたので「おはようございます。」と朝の挨拶をした。老婦人は「山に入るんですか、大変ですね。」の後、問はず語りに「町の方から、(山家の)こちらに嫁いできたんですよ。何にも知らずにね。山仕事など苦労したんですよ。…」と話しかけてこられた。「大変だったんですよ。」と応じ、支度も整ったので、一步を踏み出してしまった。老婦人はもっともっと話を、苦労話をしたかったのではないかと、歩みだした後に気付いた。見知らぬ登山姿の人であろうと、長い人生の労苦を聞いてもらいたかったのではないかと。ご主人は亡くなっておられるのだろう。子供は遠くにいて、そうそうには逢えないのだろう。老婦人のそんな心の機微を察し得ず、結果的に悪い仕打ちをしてしまったのではないかと、別れ際の老婦人の表情を思いながら、山路を歩いた。

・山里の学び舎に通じる道を指して歩きながら、心待ちすることがある。背後から「おじさん、おはようございます。」と声が掛かる。これを期待していたのだ。こちら「おはようさん。」と応じるが、中学生は自転車で追い抜いていくので聞こえたか、分からない。山里の住民は自然に挨拶の言葉がでてくる優しい人々である。山里の学び舎も都会の近代的な校舎と変わらない。終戦後に自分が通ったような、校庭をコ字型に囲った木造校舎は、山里でも既に見られなくなった。他方で、学校の廃校が目に付きだした。「…学校前」というバス停名が、現地に行くと学校が廃されて別のバス停名に変わっていることがあり、生徒は廃校跡広場に駐車するスクールバスで統合先の学校に通っている。このようなことが更に進んで、学生の元気な「おはようございます。」を聞くことが少なくなるのは、寂しいものである。

・林道に入る直前の山里で、洗濯物を干しているお婆さんに「おはようございます。」と声を掛けると、明るい返事が返ってきて、対話が弾んだことがある。問はず語りに、お婆さんは山村生活の昨今を家庭事情にも触れながら滔々と語ってくれる。書物からでは知り得ない実感を伴うものであった。精一杯頑張りながら山村の生活を送っている姿に感動し、激励の拍手を送りたくなったことがある。



山里の過疎化が進み、通り過ぎる集落で地元の人に逢うことは少ないが、できるだけ話を交わして、一瞬でも「良い時」を持ちたいと思う。それには、こちらから挨拶の一声を掛け、年配の人には「お元気ですね。」、作業中の人には「何をされているのですか。」などと話を繋げる一言を投げかけると、対話が生じ続くことになる。山里の人の話は、真率で飾り気がないだけに、心に響いてくる。単なる一片の事実を語っていても重みがある。山里の人は話したがっており、問いかけをすると多くを語ってくれるはずである。

山歩きの中で山里の人との一言を大切にしていきたい。山歩きは自分にとって、直接自然を感得するとともに、その自然に育まれてきた人々からも「心」を感得する営みでもある。